

報 会

全国文化財壁技術保存会

第8号

平成十九(二〇〇七)年八月一日発行

編集 全国文化財壁技術保存会

発行 京都市右京区京極 午塚町五八一

TEL (〇七五) 三三三二七〇七



会員の皆様には益々御健勝で、

業務にお励みのことと存じます。

保存会が発足し、十五年の年

月がたちました。その間、皆様

方の御努力並びに各方面の御支

援・御協力により立派な団体と

して認められるようになってま

いりました。昨年度からは、技

能認定証及び研修生の方には終

了証なども交付できることにな

り、益々保存会の責任が重くな

りました。

今後一層、全力を上げて保

存会の発展・充実に努力しなけ

ればならないと思っています。

皆様方の、なお一層の御支援・

御協力をお願いいたします。

会長 奥井五十吉

伝統的日本壁の

技法を残したい

石田 貞男



私の若い頃は、終戦直後でし

た。私のクラスでは今と違って、

義務教育が終ると家庭の経済的

な都合で、大半の者が卒業を待

ち兼ねていたように働きに出さ

れました。進学できる者は、わ

ずか数名しかいませんでした。

そんな時代でしたので、手に

職をつけておけば食いはずしが

ないと言うのが当時の一般的な

考えでした。しかし職人になるに

は、数年は弟子入りをしなければ

ならないので収入も無く、そう簡

単なものではありませんでした。

私は、両親が早く亡くなって

おり、家庭の都合で苦しい生活

の中で、一番適していた左官職

の道を選びました。収入の少な

い、苦しい数年の弟子の生活を

しのいで、やっと一人立ちでき

る自由の身になったのは、昭和

三十年代の初めでした。

戦火によって都市は焼野原と

なっていました。日本の国は

敗戦後わずか十年の間に目覚ま

しい復活によって安定した頃で

ありました。

戦前田舎では、昔からほとん

どの農家は小作農家でした。地

主から農地を借りた農家でした

ので、折角苦労して作った上質

米のほとんどを地主に年貢米と

して厳しく取り立てられ、自分

の家に残せるのはわずかの上質

米とくず米と麦でしたので、苦

しい生活を強いられました。

この古くからの悪い制度は、

戦後の農地改革法によって破棄

されました。今まで耕作してい

た者には耕作権利を与え、その

人達が買える安い値段にして、

自作農家になりました。

農家は裕福になり、家を建て替えたり改造をしたりして、見違えるような生活になりました。

その上、住宅金融公庫が生まれ、資金借入れができるので、若い者でも容易に家が建てられるようになり、都会も田舎も建築ブームとなりました。

資金借入れに欠かせない設計図や面倒な書類等は、素人ではできないので、資格を持つ設計事務所や工務店が引き受け、繁盛し、建築は次第に姿を変えていきました。

その当時は、まだ竹小舞下地土壁が多かったのに、何時の間にか、ラス下地、石膏ボード下地等に変ってきて、今では竹小舞下地土壁は珍しくなりました。

ブームの為、どの職種も人手が足りなくなり、器用な人は弟子入りもせず、職人の下手間をしばらくして、何時の間にか職人になった人が多く見ら

れるようになりました。

材料も、簡単に使える新建材の壁材が次第に普及してきて、今までのような手間のかかる材料作りは左官職自身が見離れていきました。自分も一時期ブームにのって手間も入れて仕事をしていました。このままでは伝統的な技法が失われてゆく事に気付いたのは、もう四十才も近づいた頃でした。

私は若い時から、左官職で身を立てるなら土蔵や神社仏閣、県内の貴重な建物、文化財建造物の修復工事に携えられる職人になりたいとの夢を持っていたので、このままではいけない、若い時の希望を貫いてみよう、仕事を切り替えようと思いました。新しい仕事を断ってでも、それは強い決意でした。自分の性格は、どんな仕事でも自身が手がけないと満足できない気性なので、職人を多く置

く事は考えていませんでした。

でも、果して古い仕事が続いてあるだろうか、それは不安でした。一方、新建材会社は改革を進め、事有る毎に新製品の発表会や実技講習会を行い、普及と販売に力を入れ、日進月歩新しい工法が生まれてゆく中、自分は時代から取り残されてゆくような思いが募って寂しくもありましたが「いやいや、自分のような者も世の中に必要なんだよ」と自分に言い聞かせながら頑張ってきました。

仕事を切り替えた当時、心配だった仕事は、どうした事か次々と舞い込んできて、お蔭で今日まで続いています。夢がなかった今、私は幸いです。そんな父親を見た長男が高校を卒業し、仕事を教えて欲しいと頼まれました。そんな弾みもあって、一層、後継者育成にも励まなければと思っています。

最近、一般住宅の仕事を中心に

手掛けている友人が、暇になったと言っていたが、これ程までに一般住宅の壁が変化して見離されている事に私は気づいていませんでした。自宅の近所に建った家を見て全くと言っていいくらい、左官の仕事が無い事に驚きました。今、左官がいなくても住宅は仕上がる時代になっているのです。

追い打ちをかけるように、阪神淡路大震災、そして近く予想されている南海大地震を想定して建築基準法で厳しく制約され、塗壁が敬遠されているのは事実で、左官職人の私は実に残念に思っています。昔から永々と続いてきた伝統的な日本の壁が、一般住宅から次第に姿が消えようとしています。文化財修復には欠かせない日本壁の工法を残さねばと、全国文化財壁技術保存会に入会させて頂いて、貴

重な技術を持つ先輩たちの技を教わり、共に伝承しなければと思っています。

今回は暗いレポートになってしまいましたが、今回は各事業所の若い後継者が研修生として真面目に、そして懸命に取り組んでいる様子を書きたいと思っています。

(石田左官工業代表・香川県)

2006伝統の名匠

仙台フォーラム

中島 英貴



展示会場

すがすがしい中、仙台で平成十八年十一月四・五日の二日間「2006伝統の名匠」が開催されました。

前日の夜、仙台に入り、頭の中で明日の運営について考えていました。どうしたら左官を知ってもらえ、詳しく伝える事ができるか、うとうとしながら寝てしまい、朝になって会場入りしました。他の業者の人や、壁保存会の会員の方々と開始時間になるまで展示品の確認や打合せで忙しい中、始まりました。

当日は土曜日にもかかわらず、あつという間に各ブースに人が集まってきました。自分も左官の担当現場につき、地元の人や各地方の方と左官の伝統と文化財を守る一関係者として「土壁とは」「漆喰とは」など、さまざまな左官技術について話しました。特に集まった人達からは、土と竹のコントラスト、自然の色

合いに「自分達はやはり日本人だなあ」と感じているといった言葉が返ってきました。

今そこにあるものを探し、伝統工法により形を作る出す左官技術が、今では逆に新鮮に感じられるのかもしれない。

フォーラムの手伝いを通じて、日本の風土にあった建物や技術などは、今少しづつ見直されており、守るのではなく伝えていくものだと、この二日間を感じました。

昔、土でダンゴを作ったりした時と変わらず遊びながらやれる仕事ができ嬉しく、今回のフォーラムでまた自分にとってよい経験になりました。

(中島左官(株)・愛知県)

職人の生い立ち

奥井五十吉

私がこの仕事に従事するまでのいきさつです。

小学校六年の時、当時兄は独立しておりまして、私に「自分がお金を出してやるから上の学校の試験を受けよ」と勧められました。そして勉強するためにいろんな学習帳などを買ってくれましたが、私は断りました。なぜかと言いますと、遊びたかったからです。



重要文化財堀家住宅の竈 (平成9年頃)

しかし、義務教育だけは受けなければと思い、高等科二年を卒業しましたが、それからなにをして良いのか目的もなく、家で四・五日ぶらぶらしております。

すと、そこへ兄が帰って来まして、俺のところへ来いと連れていかれました。六年生のときに勉強せよと言われ、それを断った為、何も言い訳が出来なかったのです。そして、兄の元へ弟子入りしました。

それから、機嫌よく仕事をしていましたがある日、父親といっしょに休息している時に、父の話を聞いておりますと「昔から職人と言うのは、他人さんの飯を食ってこなくては一人前には成れないのだ。どこの何さんは、家で習ったからだめだとか、誰かさんは遠いところから修行に来ておられるがたいした腕だとか、礼儀作法もたいしたものだ。お前もよく見習わなくては駄目だ。ましてお前の様な気ままな奴は、一人前にはなれんど」と言われ、ひどくショックを受けました。

それから、しばらくよい案が

浮かばず、考えた末、小学校の時に先生よりスバルタ教育を少し学んだことを思い出し、これを自分の体に覚えさせて、身体を鍛えようと決心しました。また、家で学んでも一人前に成れるかどうか試してみたかったことにあります。

その当時は軍隊がありましたので、二十歳までを目標としました。仕事をするときは、朝から昼まで休憩はしない。おやつのは時は十分くらい休息をする。仕事中は手袋を履かない。真冬でもシャツやズボンは二枚と履かない。じっとしていれば寒いので、働いてぬくもれと自分に言い聞かせて、火をたいて暖をとることはしませんでした。夏は、水を飲むことを我慢したり、いろんな方法で自分の身体を鍛えてきたので、軍隊に入っても苦労はしませんでした。

そして、壁で一番難しい塗り

方は何かと聞けば、黒の漆喰塗の本磨きだと聞き、ではそれ自分のものにしようと考え、十六歳頃より黒壁に取り組みました。まず優しい、大津壁の磨きよりやりかけました。順次難しい方にと、何か自分に特技が欲しかったのです。

何とか自分でやってみて、仕上げを兄に見てもらいながら、優しいものより徐々に仕上げていき検査してもらい、良ければそのやり方で現場で仕事をし納めました。次に又研究をして、だんだんと難しいものを手がけていき、何とか見られるようにはなりましたが、まだまだ百パーセントには到っておりません。難しいものです。

昨年、大津での研修会で、私の撮ったビデオを壁保存会の研修生に見てもらった時に、平成十九年に奈良県の民家で竈の上塗り黒漆喰の本磨きの研修会を

する約束をしました。私もみなさんと一緒に勉強しようと思っています。

黒壁の本磨きなどの難しいものをする前の気持というか、気構えることも大事です。

一 時期 一年のうち五月の末より十一月のかかりまで(七月、八月はさける)

二 天候を選ぶ 良い天気、風のない日(雨、湿度の多い日はなるべく避ける)

三 材料漆喰の海苔加減などの把握。自分が練るから分かるはず。下塗りと紙勘入りの漆喰など。

四 壁の仕上がりが何時ごろにするか心の中で決める。これが肝心だ。私は午後四時までと決めている。それは四時以降になると湿度が増えて仕上がし難いくいから、なるべく三時半から四時までとする。

五 塗り方などは、みんな分かっ

ておられますが、多人数でやる時は考えてやらなければなりません。こんなことを心得てやってほしいと思います。

最後に、昔の職人は技術だけで良かったが、現在は学もいる世の中です。研修生の皆さん方も、「知識と技術」を持って文化財の修理に貢献してください。

(株奥井建設・奈良県)

平成18年度

伝承者養成技術研修会 (基礎講座)

国の補助を得て、七名の研修生に前期・後期六日で、十二日間の基礎研修を行いました。

研修内容は、文化財保護法や保存行政、左官の実技実習、材料・道具研修、修理現場見学など多岐にわたり、外部講師及び会員を講師とし行ないました。



版 築



手打ち

基礎研修を終えて

平成十八年度研修生の感想

石田 均

今回一番印象に残ったことは、自分たちがいつも使っている道具であり筋などでした。あのように手間をかけ一つ一つ作っているのを見ると、普段の自分が恥ずかしく思いました。

もっと道具を大事にし、材料は粗末にしないよう心がけるようにしようと思います。

竹小舞下地ですが、自分の所と少し違っていました。地方によっていろいろな工法があると思いました。機会があれば違った材料・工法も勉強したいと思っています。

今回、この研修に参加していろいろな地方の方々と知り合い交流ができたことは、自分にとって一つの財産になったと思います。

す。又、諸先生方の指導を受け、色々な技術・技を学びたいと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。

(石田左官工業・香川県)

水野秀紀

今回の研修を終えてまず感じたことは、文化財というのはかけがえない日本の文化、そして技術、そして歴史そのものなので、それを伝承していく難しさ、仕事の工程、材料の調合・種類など、色々な話を聞いているうちに、本当に勉強になりました。

しかし、今回研修した事はこれから仕事をやっていく上で大切な事です、まだまだ勉強する事が沢山あると感じました。

今回学んだ事に、文化財保護法という法律があります。国が認めた文化財というものを自分も大切に守り、そして仕事の技

術を後世に続けたいと思います。

仕事に対する考え方も今までのような甘い考えではないけないと考えます。文化財がこれから増えていきそうなので、自分の技術がこれから生かされていくと思いますし、もっとも色々な技術を学んで頑張りたいと思います。

今回まず驚いたのは姫路城の大きさ、そのスケールです。機械もない時代にどうやって石垣を積んだのか、土はどうやって上まで持っていったのか、どのくらいの期間で建てたのか、本当に不思議でなりません。何百人もの人が姫路城にたずさわって来たのだらうと思います。

昔はその期間に戦さがあり、あまり時間をかけられなかったと思います。漆喰も、いままでに細かくなく荒っぽい感じではないかと考えます。とにかく屋根目地もほぼ全部やってあり、

その土地の気候にあわせた仕事が出来たと思います。

鰻の見学では、今までかたんに作ってしまう鰻ばかりでしたが、見学した公森、梶原両社は、今でも昔ながらの作り方で鰻を作っていてすごいと思いました。鰻にはすごい興味があったので、一緒に研修に来ていた職人さんにもいろいろ聞いて、これはどういう時に使うとか、色々聞いてとても勉強になりました。特に、黒打の化粧打ちがみごとでした。本当は最初から鰻を作る所が見たかったのですが、とにかくいろいろな鰻があっけびっくりしました。

次は、苅工場に見学に行きました。ふだん作っているマニラ苅など、どういう材料でできているのか分かりませんでした。見学に行ったら「これなんだ材料は」と思いました。苅は漆喰でも大津でも、大事なつなぎ役な

ので、硬いとか、柔らかいとか、毛足が長いとか短いとか、色々ありますが、この材料にはこの苅とか、まだまだ分らない事がいっぱいありますので、これから勉強していきたいと思っています。

苅については、作る人がだんだん少なくなってきた、自分らが現場を納める時になくなってしまわないか不安で仕方ありません。自分らと同じく、鰻を作る職人、苅を作る職人、そして石灰を作る職人、色々少なくなってきたいますが、伝統の技術を守って長く続けて欲しいと思いました。

竹については、今まで何も考えずに竹下地をやってきましたが、竹にも色々あるということを知りました。真竹に孟宗竹、まだまだ種類はあるけれど、竹も奥が深いなと思いました。竹木舞も、名古屋と京都、さまざまなやり方があると思います。

したし、決まった法則なんて無いなと思いました。編み方、竹の入れ方、土のつけ方、その地方によってさまざまなあと思いました。

文化財に携わっていく上で、まずは文化財に対する気持ちがこの研修で変わりました。本当にかげがえのない技術で、上の人から伝えられた技術・技をこれから磨いていきたいと思えます。最後に、これから研修で学びたい事として、明治建築、特に蛇腹、掻き落とし、洗い出しなど近代の仕事も勉強していきたいと思っています。

今回の研修で学んだ事をこれから生かしつつ、仕事にはげんで行きたいと思っています。

(中島左官(株)・愛知県)

大森 祐郎

前期の研修三日目に訪れた三木で二丁の鰻を手に入れました。

京都に持ち帰り、早速現場で使いました。かなり調子がいいです。気分的要素が大だと思えますが、注文しておいたもう二丁の鰻が出来上がって来るのが楽しみです。「アレをあっこで使たるかな。いやアレはああ…」物思いにふけてしまします。

研修一、二、四日目の座学では、これからの文化財の動向、自分ら職人が担うべき事の大きさが少し理解出来た様に思います。

研修のあい間、昼食時や夕食時、大浴場や夜の部屋で研修生の皆と話し合えたのもまた良い収穫となりました。土佐漆喰に屋根漆喰、海鼠壁に蛇腹引き、各種モルタルから磨きまで、自分の知らない事を色々聞かせてもらい、やりたい思いは一層強まりました。

頭の中では想像が膨らみ放題で、少し疲れてきました。色々な地方の友人が出来たのだから、

皆で集まって仕事がしてみたい。それはたぶん無理なので、せめて今後の研修では、普段あまり出来ない仕事を実技研修としてどしどし開催していただけたらと願っています。

自分にとっては、かなり世界の広がる研修となりました。皆さん、どうも有難うございました。

(旬田代千治店・京都府)

塩畑 明浩

*テーマ・法の歴史・趣旨・他
この講習を受けて、いかに自分の知識が浅かったかという事が身にしみて分かりました。

自分の知らない事ばかりだったので、プラスになる事が多く、本当にいい講習を受けることができたと思います。

講師の村上さんも貴重な時間を自分達のために作っていただき、本当に感謝しています

*テーマ・姫路城の修理の現状

この講習では、姫路城の事を歴史から材料について詳しく説明してもらって、本当に勉強になりました。

今自分は姫路城に仕事で来る事ができ、その中で普通に仕事できている事が、何十年も前に職人や市役所の方々が試行錯誤を重ねて今の仕事が出来ているのだと思うと、本当に貴重な技術が受け継がれて来ているのだと強く思いました。

そして、この貴重な仕事が出来る自分がどれだけ幸せなのかと考えさせられました。

*テーマ・姫路城の修理見学

この見学では、講師の上田さんや職人さんの田淵さんにも説明してもらい、実際現場で働いている人の声を聞いたので本当に良かったと思いますし、数ヶ所見学しただけで色々な事を勉強することができましたので、他の見学できなかった場所も色々

知りたくなりました。

*テーマ・文化財の修理

初めに建造物の年表を使って建造物の配置の変化の説明を受けました。配置の事も「伽藍(がらん)配置」といって、寺の配置についてくわしく説明をしていただきました。次に「伽藍配置」が時代ごとに大きく変わっていく内に「間取り(空間の自由)の変化」も出て来たと、一つ一つ資料の中の建造物でくわしく説明してくださいました。

この講習で伽藍配置という言葉葉を初めて聞いて、最初の方は何の事か分かりませんでした。説明を受けている内に、そういう事なのかと自分にも理解できるようになり、とても勉強になりました。

*テーマ・行政の指針

はじめに「保護法」や「文化財件数の変化」などについての説明がありました。次にスライ

ドを使って、建造物の「壁」や「造り」などについて一枚一枚詳しく説明していただきました。この講習では、中国の建造物の造りなどについてもスライドを使って解かりやすく説明していただき、日本との違いなども詳しく話されましたので、とても勉強になりました。

(岡山臨組・兵庫県)

田中 昭義

前期の研修は、大きく講義・見学・実技の三つに分けて行われました。先ず一つ目の講義の内容は、文化財保護について、文化財保護法の歴史・趣旨その他それに関する事をスライドなどを見ながら話を聞きました。

次に、世界文化遺産国宝姫路城を例にとって、城の修理の現状、どのように今まで修理が行われてきたのか、またどのような状況なのか、そして文化財の

修理について、一般の建物とどのように違うのかなど、行政の指針についても話を聞くことができました。

その他にも、文化財建造物の壁についての話や、文化財建造物の現場より実際に現場に携わった、京都府文化財保護課の小宮さんから話を聞くことができました。

次に、国宝姫路城の修理見学です。これは実際に修理を行っている左官屋さんの話を聞くことができ、材料も実際に使っている配合や、やり方など実物を見ながら説明を聞くことができました。そして鍍製造の、公森さんと梶原鍍製作所を見学することができました。普段使っている道具について製造過程を見ながらくわしく説明を受けました。次に、蒔製造の見学です。漆喰でよく用いる白雪、富士、その他、中塗り蒔やミジン蒔を

製造している三輪壁材工業さんの工場を見学することができました。

最後に、壁下地やその他に使われている竹について、京都の竹平商店の店を見学、そして戸田淳司さんから、竹について色々な話を聞くことができました。

最後に実技です。大津市にある津田左官工業所の工場をお借りして、木舞竹、下地縄、そして木舞掻きを実習しました。木舞に使う竹は一から竹を割る所から、下地縄は藁で編むところから実習しました。薄壁の下地窓につかうよし(アシ)は、近くの湖岸に植生しているものを採りにいって使いました。

この基礎コースを終了して一番印象に残ったのは、文化財の仕事と一般の仕事とは、全く違うというのを改めて実感したことでした。そして、それを認

識して仕事をするのがとても重要だと思いました。

後期も知らないことはどんどん質問して、勉強していきたいと思しますので、どうぞよろしくお願いします。

(柳佐藤左官工業所・京都府)

伊藤 孝

文化財建造物を見学研修して

(澤井家住宅見学)

今回、澤井家住宅を見学させてもらうことになり一つ感じた事は、壁の数が多いいと思いました。その壁一つ一つに「ひげこ」を打ち、ちり廻りをし、中塗り上塗りをする。当初のひげこの間隔、一寸五分(四五mm)だったため、今回の修理も同じ一寸五分で行なう。文化財の建物はなるべく元の材料で、元の位置に直すのが基本です。

(萬福寺松隠堂)

萬福寺松隠堂を見学させてい

ただく前にまず、素屋根の大きさに驚きました。それも丸太足場で組んである。これも職人技だと感じました。

客殿本体の屋根は、全体に柿葺(こけらぶき)である以前は、棧瓦が葺かれていましたが、調査をすると、昔の柿葺のあとがでてきたため今回は柿葺になりました。

柿の材料は、さわらの木で厚みは約一分二厘(三六mm)で長さは一尺二寸(三六cm)。葺きしろが約一寸。今回は、柿の間に一尺ピッチに銅板が四五cmの巾で木の腐食防止の為に入れています。それでも、約二十、二五年位しかもたないということでした。

(しっくい浅原・京都府)

本田 俊之

(澤井家住宅を見学して)

一番印象に残ったのは、ちり

回りをトンボ(ヒゲコ)を使って中塗りをするというやり方でした。

まず荒壁を塗り、大斑直し、小斑直し、次にちり回りにトンボを打つという作業でした。次にちり鋺でちりを塗り、壁の厚さに応じて、一回二回と塗り、中塗りを仕上げるという作業でした。

大阪では、仕事の単価が安いために、トンボを打つちり回りを塗るという作業はほぼありません。こういう作業をすると手間はかかるが、ちり回りはまっすぐ通るし、多少うまく中塗りが仕上げられなくても綺麗に見えると思えました。

(萬福寺松隠堂を見学して)

印象に残ったのは、柿葺で作った屋根は初めて見たことです。萬福寺の客殿の柿葺は、サワラという木材でした。

この屋根は木材であるために、

瓦とちがって腐るために殺菌作用のある銅板を使い、十枚おきの幅で挟んでいました。実際に萬福寺にある西方丈、東方丈という建物があって、西方丈の方には銅板が挟んであります。このためか、東方丈にはコケがはえて黒ずんだ屋根になっていましたが、西方丈はあまり痛んだあとは綺麗でした。銅板にそんな効果があるとは知りませんでした。

壁も見えたかったのですが、中に入れなくて残念でした。

(本田左官工業所・大阪府)

文化財フォーラム

「世界文化遺産姫路城と漆喰壁に生きる人たち」

全国文化財壁技術保存会と姫路市の共催事業として平成十八

年十一月、姫路市で「文化財フォーラム」を開催しました。

これは、姫路城大天守の修理をまじかに控え「伝統的左官技術」の継承に努める保存会の会員の皆さんの生き方や匠の技を紹介するとともに、姫路城をはじめ、文化財を保存・継承する上で「漆喰壁技術」の果たす役割や、伝統技法を継承していく上での課題等を探り「匠の技」の継承と普及・啓発するために開催したものです。

まず「世界文化遺産姫路城と壁技術」と題して、武内正和さん(文化庁文化財調査官)に基調講演をしていただきました。

対談は「伝統左官に生きる」と題して、コーディネーターに

狩野久さん(日本城郭研究センター名誉館長)、対談者に奥井五十吉さん(選定保存技術保持者・漆喰壁)、佐藤治男さん(選定保存技術保持者・古式京

壁)により、貴重な体験談などのお話をしていただきました。

パネルディスカッションは「文化財の保存と漆喰壁」をテーマとして、コーディネーターに西澤英和先生(京都大学大学院)、パネリストに後藤佐雅夫さん(全国国宝重要文化財所有者連盟)、梅川功夫さん(保存会事務局)、鷺尾正和さん(ひょうごヘリテージ機構ひめじ)、村上裕道さん(兵庫県文化財室)、上田耕三さん(姫路市立城郭研究室)により、文化財保存についての現状や課題などを、さまざまな角度から議論していただきました。

併せて会場では、伝統壁の塗り見本や材料、道具の展示、壁保存会の活動の様子や夏休み子供壁塗体験会開催の様子などを写真パネルで紹介しました。



展 示



基調講演



奥井さん(右)、佐藤さん(左)



対 談



パネルディスカッション

事務局だより

八号の発行にあたり、できるだけ会員の皆様に執筆をとお願いしましたが、多くの原稿をお寄せいただきましたことを嬉しく思っています。執筆いただきました皆様に御礼申し上げます。保存会ホームページを開設しています。情報収集、会員交流等にご活用ください。

(編集事務局 梅川・上田)